

2020 年 褥瘡・NST 給食委員会業務活動報告

褥瘡・NST 給食委員会委員長

宇野 智子

皮膚・排泄ケア認定看護師
褥瘡チーム

西谷 美香

栄養科・NST

関川 由美

リハビリテーション科・SST

横田 奏平

はじめに

2020 年、誰がここまで大きな医療体制の変革を予想したでしょうか。新型コロナウイルス感染症により、世界中の医療、日本中の病院、そしてチーム医療についても多くの活動変更を余儀なくされた。

当院では、褥瘡・NST 給食委員会が 2019 年 4 月に新体制へと移行した。委員長を拝命し、チームメンバーの支えで何とか無事一年を終えようとしていた矢先、コロナ禍がやってきた。感染対策として何に気をつければよいかすら不明瞭であった初期から、褥瘡チーム、NST、摂食嚥下支援チーム (swallowing support team : SST)

ではチーム医療の本質は守り、介入患者さん、職員内に感染を拡げない配慮も取り入れつつ、回診、ミーティングを継続した。入院患者数の減少に伴い、介入件数はどのチームも総じて影響を受けたと言わざるを得ないが、チームメンバーがお互いを励まし合い、院内感染を起こすことなく活動を維持できたことは大きな成果と考えている。この場を借りて感謝申し上げたい。

新体制にあたり、各チームのミッションをメンバーで再認識するためにも、今年の時点ですでに完成していた SST ロゴに加え、新たに褥瘡チーム、NST のチームロゴを作成した (図 1)。フルーツで統一したのにも意味がある。褥瘡、低栄養、摂食嚥下機能障害患者はリンクす



図 1 当院褥瘡・NST 給食委員会の「木」

(ロゴデザイン横田言語聴覚士、上：褥瘡チーム、左：NST、右：SST)

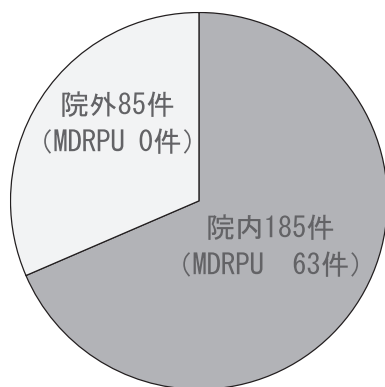


図2 褥瘡発生状況

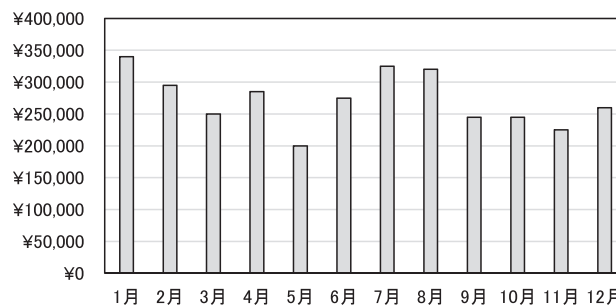


図3 月別褥瘡ハイリスク患者ケア加算額

表1 褥瘡新聞

発行月	タイトル	作成者
1月	検査値からみる栄養アセスメント	臨床検査技師 吉田 倫子
2月	腫の褥瘡予防	皮膚・排泄ケア認定看護師 西谷 美香
3月	保湿の話	薬剤師 安住 匡人
4月	ポジショニンググローブについて	理学療法士 谷口奈恵子
5月	サルコペニアと栄養	管理栄養士 藤原 礼奈
6月	クリコロを知っていますか？	臨床検査技師 吉田 倫子
7月	院内採用のサージカルテープの紹介	皮膚・排泄ケア認定看護師 西谷 美香
8月	イソジンシュガーパスタの軟膏の話	薬剤師 安住 匡人
9月	車いす座位でのシーティングの工夫	作業療法士 吉田 直樹
10月	褥瘡治療過程に必要な栄養素とは？	管理栄養士 林 元子
11月	亜鉛と銅はバランス良く！	臨床検査技師 三室 有瑠
12月	踵注意報！！	皮膚・排泄ケア認定看護師 西谷 美香

ることが多く、チーム間の密接な連携が不可欠だ。異なるフルーツだが同じ一本の市立病院という「木」でつながり、枝葉を伸ばし、主治医、病棟看護師が病気の治療を行う傍らで、患者がより快適に過ごせるよう「木陰を提供する」のが私たち3チームの共通したミッションだと考えている。新たに作成した褥瘡チーム・NSTロゴに込めた思いは各チームの業務活動報告を参照いただきたい。

以下、2020年の褥瘡チーム、NST、SSTの業務活動について報告する。

1. 褥瘡チーム

1) 褥瘡発生状況、褥瘡ハイリスク患者加算

2020年の褥瘡発生総数は270件、院内発生185件(MDRPU (medical device related pressure ulcer: 医療関連機器圧迫創傷) 63件)、院外発生85件(MDRPUなし)であり、昨年の282件と比較し総数は減少傾向にあった(図2)。褥瘡ハイリスク患者ケア加算は653件(収益

3,265,000円)算定し、昨年の764件と比較し減額となった(図3)。これらはコロナ禍の影響により、入院患者総数、手術件数が減少した影響もあるものと思われる。

2) 褥瘡新聞

表1に2020年の内容を示す。コロナ禍の影響により集合型の研修会開催が難しくなり、壁新聞の果たす役割が増した1年であったと思われる。今年度は残念ながら、長時間仰臥位による踵圧迫で生じた褥瘡が複数院内発生した。そこで、病棟スタッフへ向けた啓発を褥瘡新聞を用いて複数回実施し、再発予防に努めた。

3) 新たな取り組み

① NPWTの積極的導入

褥瘡の治療方針を決定する際には、患者の全身状態、入院の原因となった疾患の治療スケジュール等も考慮する。これまで当院で褥瘡に対しNPWT (negative pressure wound therapy: 陰圧閉鎖療法)を実施する際には、機器を毎回レンタルしていたが、当チームメンバーである大久保医師所属科である皮膚科で創傷治療システム1台を購入したため、より積極的なNPWT導入が新たな

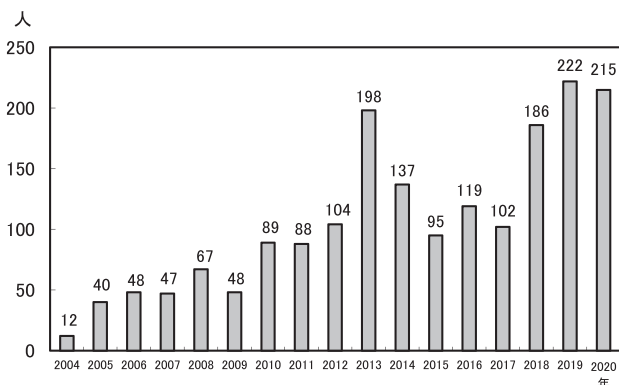


図4 年別 NST 新規依頼患者数推移

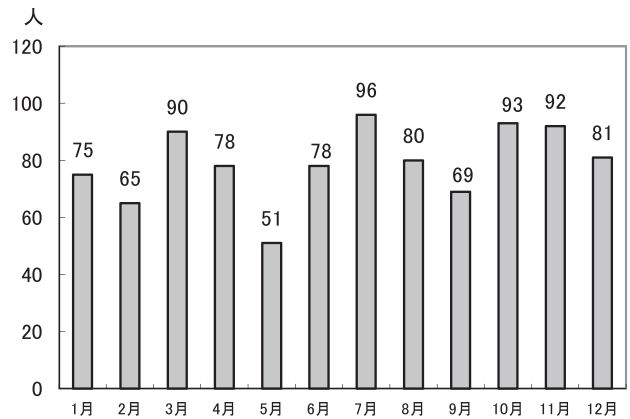


図5 月別 NST 回診人数

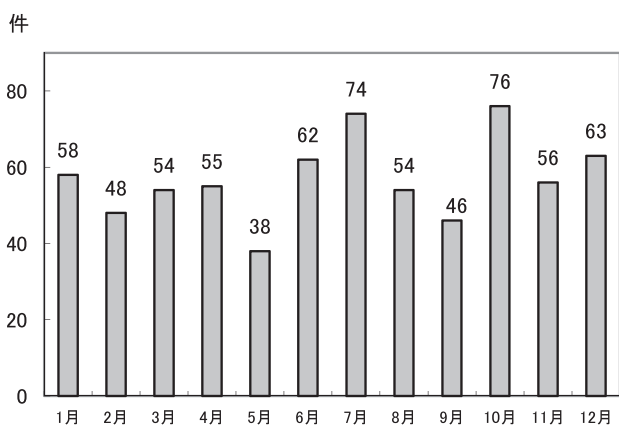


図6 月別 NST 加算算定数

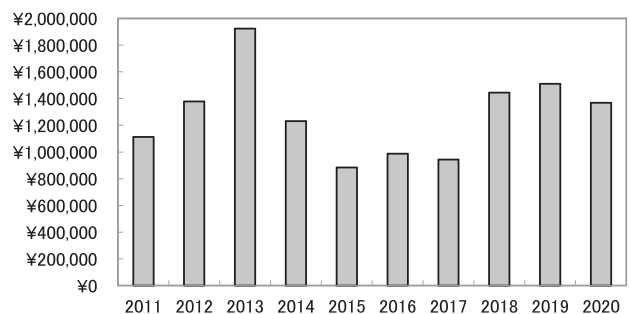


図7 年別 NST 加算算定額の推移

選択肢となった。NPWTを導入することにより、より早い治癒が可能となり、患者、病院の双方にとって有益であると考えられる。今後も積極的活用を続けていきたい。

② チームロゴの作成

今年は新たな取り組みとして、チームロゴを作成した(図1)。やわらかいモモを両手でやさしく包み込むように、入院患者さんのケアを行っていききたいという願いから誕生したロゴである。

③ IADのケア

IAD (incontinence-associated dermatitis: 失禁関連皮膚炎)は尿または便(あるいは両方)が皮膚に接触することにより生じる皮膚炎である。当院でも、寝たきりによる機能性尿失禁が原因の皮膚障害が発生した場合、IAD バストプラクティスを基に、予防ケア・早期対応を行えるよう、勉強会などを通して職員へ周知してきた。スキンケアとして、弱酸性の皮膚洗浄剤のコラージュフルフル泡石けんを新たに採用し、効果的な洗浄を徹底している。発生時には、院内製剤であるCMCアズノール軟膏を使用し、早期治癒に取り組んでいる。

2. NST

1) 介入症例

2020年はコロナ禍で入院患者数減少の中、2019年に次ぐ215名の新規NST依頼があった(図4)。回診回数を減らすこと無く2019年同様の計99回、延べ948名に栄養介入を行った(図5)。令和2年度診療報酬改定により算定対象が拡大し、結核病棟、精神病棟が加算対象となった。算定要件は一般病棟が週1回に対し、結核病棟、精神病棟において、入院1ヶ月は週に1回、入院2ヶ月以降6ヶ月までは月に1回限りとなっている。4月から12月までの9ヶ月で精神病棟において70件の加算件数を占めた。また2019年から週2回の回診が定着し、退院や転院前にタイムリーな回診が可能となり、介入件数増に繋がっていると評価する。

NST加算の算定数は、延べ684件、1,368,000円の収益で、前年比90.6%であった(図6・7)。依頼科は呼吸器内科が75名と前年同様に最も多く、次いで外科が37名、算定対象となった精神科は過去5年間で最多の25名であった。昨年同様に入院化学療法をはじめとするがん患者への介入、周術期の栄養管理、ADL不良の高齢者

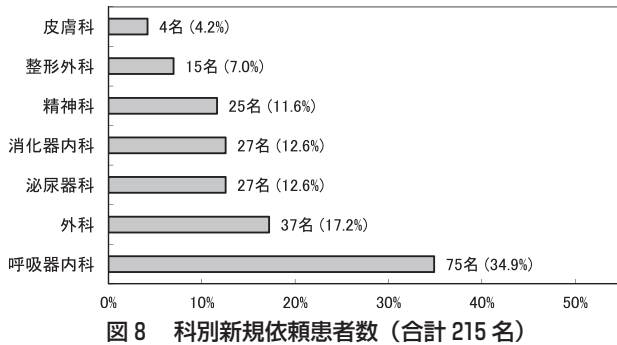


図8 科別新規依頼患者数 (合計 215 名)

への介入が多くを占めていた (図8)。

2) 新たな取り組み

コロナ禍で、集合型の研修会の制限が生じた今年は、例年実施の研修会開催が難しいことから、NSTの啓発に苦慮した1年であった。創意工夫で形を変えた取り組みを報告する。

① NST 通信の再開

2005～2012年まで発行していたNST通信を8年経て、名称も新たに「NST NEWS」として再開した。4月以降、1季節1回の発行を目標に復活の第1号(2005年から38号)から3回発行することができた(表2)。

② NST・褥瘡合同研修会紙面開催

NST発足以来継続してきた勉強会(2019年より褥瘡チームとの合同で名称も研修会に変更)も集合型による開催は2回のみとなったが、新たに院内Webによる紙面開催を12月より開始した(表3)。

③ チームロゴ作成

NSTでは新たにチームロゴを作成し、チーム活動の際に使用している。このチームロゴ(図1)には、患者の「食べる」ということを多職種で継続的にサポートできるようにという願いが込められている。真ん中の一粒が患者、その粒を職種の異なる数多くのNSTメンバーを表すブドウの粒が取り囲んでいる。ブドウの一粒一粒が団結することでブドウの房を形成し、そこからツルが

伸びている。ツルは退院後に患者が歩む道を表している。NSTが見据えるゴールは退院ではない。退院・転院後、食事で困ることがないように、チームでは入院中から、患者の希望、自宅環境、家族のサポート状況、転院先の状況等にまで気を配り、様々な提案を行っている。

3) NST 関連認定教育施設としての教育活動

例年、日本臨床栄養代謝学会(旧日本静脈経腸栄養学会)のNST専門療法士実地修練認定教育施設として、さらに日本栄養士会の栄養サポートチーム担当者研修認定教育施設として、道内から実習生を受け入れてきたが今年は無開催に終わった。当院は数少ない認定教育施設で特に日本栄養士会の教育施設は道内で当院のみであり、今後も地域のNST専門療法士および栄養サポートチーム担当者の輩出に貢献していきたい。

3. SST

1) 活動状況

摂食嚥下障害の治療には本人や家族も含めて非常に多くの人に関わることになる。朝・昼・晩と三食食事を摂るのであれば、当然食事介助や口腔ケアなどといった関わりを特定のスタッフが一人で行うのは困難であり、そういった意味で、すでに私たちはチーム医療を実践しているとも言える。

しかし、実際のところ何の問題もなく連携がとれているかと言われると、甚だ怪しいと言わざるを得ない。摂食嚥下障害について特に苦慮する点の一つとして、共有すべき情報の煩雑さとそれに伴う情報共有の難しさが挙げられる。このような問題に対しては、病棟や診療科を超えて調整・管理を行う組織が必要だと思われ、それらを実行して摂食嚥下障害に関与するすべての患者とスタッフをサポートするのがSSTの目的でありモチベーションの一つである。

2019年の9月にSSTを発足してから約1年半が経

表2 NST NEWS

	発行月	タイトル	作成者
第38号	4月	NST通信再刊	外科・消化器外科 宇野 智子
第39号	6月	市立室蘭総合病院NSTについて	管理栄養士 平岡 彩子
第40号	10月	リハ栄養の基本	理学療法士 前田有一郎

表3 NST・褥瘡合同研修会

	開催日	内容	講師
第41回	1月28日	消化器がんの薬物療法と栄養療法	消化器内科 小野寺 馨
第42回	8月18日	NST・褥瘡チーム・SSTのBACKSTAGE	外科・消化器外科 宇野 智子
第43回	12月22日	経腸栄養についての基礎知識(紙面開催)	管理栄養士 平岡 彩子

表4 SST 勉強会

	開催日	内容	講師
第3回	8月17日	摂食嚥下チーム勉強会「嚥下筋を鍛えよう」	言語聴覚士 横田 奏平

表5 嚥下新聞

	発行月	タイトル	作成者
第5号	7月	トロミサーバーの設置について	言語聴覚士 横田 奏平
第6号	8月	嚥下筋を鍛えよう	言語聴覚士 横田 奏平

つ。その間、勉強会を主催したり、依頼を受けた患者の評価を手伝ったり、情報共有しやすいような環境づくりに努めたり、といった活動を少しずつ行ってきた。マンパワー的な問題もあり至らない点も多々あると思うが、活動実績として以下に報告させていただく。

2) 活動実績

今年度は新型コロナウイルス流行の影響を受けて予定していた活動の多くが中止や延期を余儀なくされた。特に嚥下障害に関しては、2020年の4月には嚥下医学会から発表された「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行期における嚥下障害診療への注意喚起」等を参考にしながら、いかにして嚥下障害の治療と感染対策を両立するかを模索する1年となった。

① 勉強会、嚥下新聞の発行

定例の勉強会は当初は月1回のペースでの実施を検討していたが、何度かの延期を得て8月に1度開催するにとどまった（表4）。病棟単位での小規模な勉強会についての依頼もあったが、院内Phaseに応じて中止、または延期になっている。嚥下新聞は表5のとおり発行している。

② SST 回診・カンファレンス

昨年度の末から始めたSSTの回診は、今年度も1年を通して継続することができた。週1回のペースで開催し、摂食嚥下障害について評価および治療の指導・提言を行っている。

③ 摂食機能療法と摂食嚥下促進加算

摂食嚥下障害について治療介入を行うことで、摂食機能療法を算定できる（図9）。当院ではNST主導のもと、そのほとんどを病棟看護師が算定している状況である。混乱を避けるため、これまでST等の他の職種では算定していなかったが、SSTの介入の際に摂食機能療法を算定できる仕組みの構築を行い、1年間で34件算定している。

また、令和2年度の診療報酬改定で、一定の条件を満たしたうえでSSTが介入すると摂食機能療法に上乗せして算定できる摂食嚥下促進加算が新設されており、当院でも算定できるよう申請済みだが、実際に算定するに

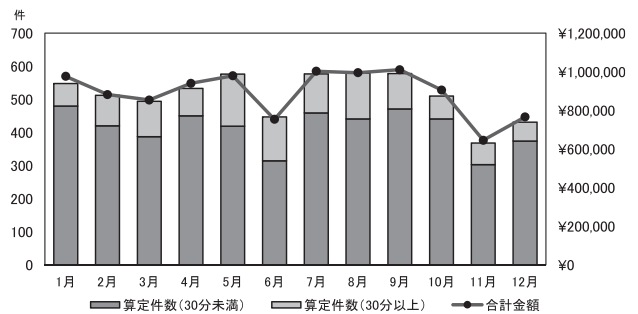


図9 年月別摂食機能療法の推移

は至っていない。

④ 相談窓口の設置

昨年度末に相談窓口を設置し、ポスターも配布している。病棟からの相談の他、外来から2件、化学療法室から1件相談の電話があり、適宜対応している。

3) 来年度の展望

「活動状況」で述べたように、摂食嚥下障害の治療においては患者や家族も含めて関わる人すべてがチームである。SSTはこのチームがうまく機能するように、「情報」の提供や管理・調整を行う役割を担うことができると思う。

これまで労力を割いてきた活動は、以下の二点に分別される。1つは、勉強会や嚥下新聞などを通して、嚥下障害についての「情報」の啓発すること。もう1つはラウンドやカンファレンスを通して、「情報」共有を行うこと。

これらに加えて、患者の病態についての「情報」を提供する事も重要だろう。咽頭や喉頭は、機器を使って覗かない限りは視診できない、いわゆるブラックボックスである。誤嚥しているがむせが出ない不顕性誤嚥という病態も存在するため、どうしてもスクリーニングでは拾いきれない場合がある。また、単に誤嚥があるかどうか、というだけではなくどのようなタイプの嚥下障害かを確認できなければ、治療やリハビリテーションの方針も曖昧なものになりやすい。当院でも嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査を行うことは可能であるが、いずれの検査についても心理的なハードルが高く、時間的・人的な資源も

表6 業績集

1. 林 元子, 関川由美, 星野裕子, 平岡彩子, 早坂ゆかり, 城前有紀乃, 藤原礼奈, 木村明菜, 宇野智子, 佐々木賢一: ONSを拒否するも個別対応食により低栄養改善が得られたがん患者の1例. 一般演題(口演), 第23回日本病態栄養学会学術集会(2020年1月24-26日 京都)
2. 平岡彩子, 宇野智子, 関川由美, 林 元子, 星野裕子, 早坂ゆかり, 城前有紀乃, 浅野由美子, 中田知美, 岩城 薫, 吉田倫子, 横田奏平, 前田有一郎, 佐々木賢一: 当院におけるチーム医療システムを活用した癌患者に対するNSTの取り組みについて. 一般演題(口演), 第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会(2020年2月27-28日 京都 誌上開催)
3. 宇野智子, 吉田倫子, 関川由美, 古内久美子, 浅野由美子, 前田有一郎, 三浦るみ, 林 元子, 星野裕子, 河原林治朗, 佐々木賢一: 当院における血清亜鉛値測定の現状と低栄養を含めた患者背景因子に関する検討. 一般演題(口演), 第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会(2020年2月27-28日 京都 誌上開催)
4. 大久保絢香, 西谷美香, 高木美穂, 谷口奈恵子, 林 元子, 安住匡人, 大山浩史, 宇野智子, 小川宰司: 多発褥瘡に広範な灯油皮膚炎を合併した独居高齢者の1例. 一般演題(口演), 第12回日本褥瘡学会学術集会(2020年9月10-11日 神戸 Web開催)

必要になるため気軽には行えないという現状がある。当然、これらの検査が不要な場合もあるが、本来必要であったにもかかわらず検査の実施に至らなかったケースも少なくないのではないだろうか。

今後は患者の評価という形で「情報」を提供する手伝いができるようにしたいと考えており、機材の調達なども含めて調整中である。蛇足であるが、これらの検査ができると摂食機能療法の算定件数の増加や摂食嚥下支援加算の算定に繋がることも期待できる。

立ち上げ当初は有志を集めてわずか5人で始まったSSTであるが、少しずつメンバーが増え、令和3年度は13人でのスタートとなる。活動の場も少しずつ広がってきており、今後も院内の摂食嚥下障害の治療に貢献できるよう尽力していくつもりである。摂食嚥下障害について何か困りごとがあれば遠慮なく相談して欲しい。また、一緒にSSTで活動したいスタッフがいらっしゃればこちらも遠慮なく連絡をいただければ幸いである。

4. 院内研修会

2020年は年3回(集合開催2回、誌上開催1回)の研修会を実施した(表3)。研修会はコロナ禍の影響を最も受ける形となってしまった。今年度は病棟スタッフの身体的・精神的疲弊を鑑み、集合型・Zoomによる研修会を自粛した背景があった。来年度は紙面開催を継続し、感染対策に配慮した一部集合型の開催も含め、回数を徐々に戻していきたい。

5. 学会活動

コロナ禍による中止やオンライン開催に伴い、各チームメンバーが筆頭演者としての発表も全国学会4題と例年より少ない実績であった(表6)。今後の学会は我々のような地域医療の中核を担う病院にとっては、Web開催が認められることによるメリットが大きいと思われる。今後はWeb参加が可能な全国学会についても積極的に演題を登録し、参加についてもより多くのメンバーができるようになればと考えている。今後も当院のチーム医療活動について積極的に北海道、日本全国の医療施設へ向けて発信していきたい。

おわりに

多くの医療従事者にとって2020年は、準備もままならないまま突然短距離走に駆り出され、走っているうちにコースがマラソンに変わっていることに気がつき呆然とした、という感覚に近いのではないだろうか。

まだこのマラソンは終わりそうにない。だが、ゴールは必ず来る。その日まで、チーム医療の本質を見失うことさえなければ、褥瘡チーム、NST、SSTの活動はコロナ禍の影響をさほど受けることなく継続可能だと信じている。常に患者のことを第一に考え、病院職員と協力し、創意工夫の精神を忘れずに活動を続けていきたい。